赤瀬川原平著

千利休 無言の前衛

岩波新書

104

赤瀬川原平著

千利休 無言の前衛

104

赤瀬川原平

1937年横浜生まれ
武蔵野美術学校中退
画家，作家
著書—「芸術原論」
「超私小説の冒険」(以上，岩波書店)
「超芸術トマソン」(ちくま文庫)
「櫻画報大全」(新潮文庫)
「東京ミキサー計画」(PARCO 出版)
尾辻克彦の名で
「贋金づかい」(新潮社)
「東京路上探検記」(新潮文庫)
「父が消えた」(文春文庫) ほか

千利休 無言の前衛　　岩波新書(新赤版) 104

1990年1月22日　第1刷発行 ©

定価 550円
(本体534円)

著　者　赤瀬川原平

発行者　緑川亨

〒101-02 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5
発行所　株式会社 岩波書店
電話 03-265-4111
振替 東京 6-26240

印刷・理想社　製本・田中製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします　　Printed in Japan
ISBN 4-00-430104-1

目

次

序　お茶の入り口……1
日本人とお茶　3
利休と茶の湯　5
アンチ利休ファン　9
無口な芸術　17
I　楕円の茶室……21
一　利休へのルート……23
日常への力　23
前衛の消失点に見たトマソン　32
利休とバッタリ出合う　37
家元からの電話　44
二　縮小の芸術……51
歴史の勉強　51

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

ディテールへの愛　57
縮小のベクトル　68
ビートたけしとマーロン・ブランド　71
黄金の魔力　76
桃山時代のアンデパンダン　82
三　楕円の茶室……87
利休・秀吉、位置の逆転　87
バランサー秀長の死　90
茶の湯攻めの恐怖　97
楕円の茶室　102
II　利休の足跡……115
一　堺から韓国へ……117
トレンドの町・堺　117

堺港跡の巨石群 121
待庵の秘密 127
二 両班（ヤンバン）村から京都へ …… 133
両班村で見た躓り口 133
紙張りの合理性 139
うねる植物 144
時の魔術 150
醍醐寺の花見 157
金の茶碗の感触 161
Ⅲ 利休の沈黙 …… 167
一 お茶の心 …… 169
生きていることの不安 169
古新聞の安らぎ 174

目　次

手洗いの蛇口洗い　179
財布の中の儀式　182
リベラ物件の発見　186
間を抱えたゲーム　191
受け皿の形をした日本列島　195

二　利休の沈黙……199
意味の沸点　199
そして沈黙が生れる　203
不肖の弟子　207

三　「私が死ぬと茶は廃れる」……212
和服の行列　212
形式の脱け殻　215
パウル・クレーの落し穴　219
織部の歪む力　221

前衛の民主化というパラドクス　225
結び　他力の思想……231
現場の作用　233
自然に身を預けて　236
あとがき……241
参考文献……245

序

お茶の入り口

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongboo

日本人とお茶

私たちはいまふつうにお茶を飲む。食事のあとの、口をうるおす飲料としてお茶を飲むわけである。うるおすのだから水であってもいいし、麦茶であってもいいが、和食のあとではやはり緑茶がいい。和食と立派に言わなくても、ふつうの日本的な食事、鰺の塩焼き、キンピラ牛蒡（ごぼう）、白菜の漬物といったようなもの。ホーレン草のおひたし、焼海苔、納豆、沢庵、豆腐の味噌汁、等々、食べたいものを書いているとキリがないが、そういった昔からある日本のふつうの食事のあとは、やはり緑茶が飲みたくなる。それらを食べたあとの口に合うのである。

すべてがトロトロと脂っこいものでからめられた中華料理のあとにはウーロン茶やジャスミン茶がいいし、肉類がどしんと腹に入る洋風料理のあとは、コーヒーか、あるいは強いウ

イスキーをストレートでぐいと飲んでみたくもなる。それぞれの土地の飲み物は、長い歴史の中で、それぞれの土地の食べ物と調和するものが選ばれて出来上がっている。

ところが日本のお茶の場合、それがたんなる飲料を超えて、茶道という一つの道にまでなっているのだ。それが子供のころにはどうしても不思議だった。茶道の環境に育ったものならいざ知らず、近年のごくふつうの一般の家庭で、お茶といえばたんなる飲み物である。

たとえば酒というとたんなる飲みものではない。酔うという特異な状態が生れる。だからその状態を究めようというのなら、動機としてわかるのである。しかしお茶という、たんなる飲み物を究めようというその動機は、考えたら不思議なものだ。

たとえば家を出て駅まで歩いて電車に乗る。歩くのは移動のための方便である。そのたんなる歩行を楽しむものに散歩というものがある。しかしそれを究めようとする歩道、もしくは歩行道なるものは、ない。

たんなる散歩は楽しいものだが、それは人間の頭の働きというものが、つい働きすぎて思想として固まろうとする傾向を、むしろときほぐすものである。たんなるお茶もそれと同じで、食事を終えて、満ち足りた疲労をときほぐすために、ゆっくりと、散歩のようなリズム

でお茶を飲む。凝固剤ではなく、あくまで溶剤としての働きである。

それなのに、日本の歴史はそのたんなるお茶を究めていって茶道というものを創り上げている。ときほぐすはずのものがそこで凝結して固まりながら、一つの思想を生み出している。あり得ないことが起きているという感じである。お茶は散歩とは違うものになっていたのだ。

絵を描くこと、あるいは歌舞音曲、武術、学問などが究められて、一つの思想的固まりに至るのはわかるのである。しかしたんなるお茶がそれを成し遂げたというのは、考えてみればじつに不思議な、滑稽な、しかし痛快な、快挙とでもいえることではないのか。

日本人の場合、そのような固まったお茶の世界が茶道としてあることを、みんな常識として知っている。考えてみれば不思議なはずのことを、すでに考えずに知っているのだ。

利休と茶の湯

さてお茶といえば千利休である。私の場合はたしかに小学校か中学校の授業で知ったのだと思う。アヅチモモヤマの時代に千利休という大変な茶人がいて、茶道というものが生れた。

その千利休は、太閤秀吉に切腹をさせられた。
茶人とはどのようなものか、実態はわからなかったが、茶人の茶とはたんなるお茶である。それが何故切腹という事態になったのか。痛いだろうな。
というのが小中学生の正直な感想だった。何もわかってはいないのだけど、しかしたんなるお茶がたんならざるものであるらしいということを、その「切腹」という痛さによって印象づけられたのである。その茶道でそんなことになった千利休とは、どんな人なのか。
大人になって知ったことだが、茶道の世界のことは、もう少し柔らかく「茶の湯」という。その世界を創り上げたのは千利休一人ではない。たんなるお茶にはじめて侘び茶という思想をまぜようとしたのが珠光（じゅこう）という人で、次に紹鷗（じょうおう）という人が受けついで、それを利休が完成させたのだといわれている。しかしその三者の中で日本国民の皆が知っている名前はというと、圧倒的に千利休である。少しお茶の世界に深入りしたところで紹鷗や珠光の名を知るが、茶人といえばまず誰しもが千利休なのである。
もちろん大衆認識がすべて正しいとは限らない。アメリカ大陸はコロンブスによって発見されたが、結果としては二番手に到着したアメリゴの名を冠することになってしまった。本

命のコロンブスは南米コロンビアにその名をわずかにとどめたにすぎない。パイオニアをさしおいて二番手が漁夫の利を得るというのはよくあることである。

しかし茶の湯は発見でもあるが、作業を積み重ねた上の創造である。先人の時代からもやもやとはじまっていたものを、はっきり確立した人として千利休の名が焼きついているのだ。つまり先制打を放ち、それをバントで送った人はいる。しかしそれをきちんと得点に結びつけるタイムリーを打った人、つまり勝利打点は利休なのだ。

チャンスに打順が回る、つまり時を得た好運ということもあるだろう。それを考えると、人の才能というのは必ず好運を選んで発芽してくる。利休の才能というものは、その時代の運命、その流れによって利休に配分されたものである。逆にいうと、その時代の運命もまた人の才能の中の一部なのだ。

利休に関する文献的史料は、利休自身の手紙や茶会記（ちゃかいき）、また利休の弟子たちの書いた茶書など、かなりの数が残されている。また研究家も多く、新しく発見された史料や考察なども増えてきている。それらを少しずつかじっていくと、利休の思想のようなものがおぼろげに見えてくる。その内側のことまではなかなかわからないが、その思想の外形のようなものは、

楽茶碗、躙り口、二畳台目、竹花入といった利休の作り出した証拠品を一つ一つ点線で結ばれるようにして、アウトラインがあらわれてくる。

しかし本当はその内側のことを知りたいと思うのである。思想のアウトラインに囲まれた、その中での微細な感覚反応のようなものを知りたい。そうすれば利休は、いま生きている私たちとダイレクトに交流できるのである。言葉を介さずに話ができる。とくにその少年から青年時代の感覚史、みたいなものを知りたいと思うのだけど、そのころの史料は皆無に等しい。史料が残るのは、何にしてもその人が偉くなり、思想が形成されてからのことなのである。

そうなるとあとは私たちの想像力だ。利休の思想のアウトラインの点線のところまで近づいて、その点と点の隙間から中をのぞき込む。

まず具体的な人物像をのぞき込んでみたいと思う。

千利休とはどんな人物だったのか。

身長は何センチで、体重は何キロだったのか。

歩き方はどんなふうだったのか。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo